

梅津新聞

(近世編④)

2020年
9月10日 木曜日常陸太田市郷土資料館
(西二町 2186)
TEL:0294-72-3201

綱條、 マイナスからのスタート

みとはんだい だいはんしゅとくがわみつくに
水戸藩第2代藩主徳川光圀がその生涯を閉じたところ、たび重なる凶作がおり、藩の収入も減少していました。つまり、綱條の3代藩主としての仕事は、財政難を脱出するところから始まるのでした。

さて、水戸藩の財政難のもととなる農

寛文 3年(1663)	3万石が附荒
〃 8年	2万8000石が附荒
〃 9年	領内が大干ばつ※2
〃 10年	8万石が洪水の被害にあう
延宝 2年(1674)	不作
〃 3年	不作
〃 8年	暴風雨・大洪水のため大凶作
〃 9年	飢饉がおこる
元禄 4年(1691)	凶作
〃 11年	江戸小石川邸が火災
〃 12年	大風水害におそわれる
〃 13年	江戸小石川邸に將軍を迎える
〃 16年	江戸小石川邸が再び火災

光圀の時代

綱條の時代

業の衰退は、光圀が藩主になってから3年目の寛文3年(1663)、水田3万石が附荒※1となる大凶作から始まりました。さらに左表のとおり、災害や凶作が続ぎ、それが深刻な財政難へとつながります。藩は財政難を脱するため、領民と藩士からお金を取り立てて急場をしのごうとしましたが、延宝8年に暴風雨と大洪水が重なり大凶作がおこるなど、

農業は衰退していくばかりでした。そんな中、元禄3年(1690)に3代藩主に就任した綱條ですが、就任早々凶作に見舞われたり、江戸の水戸藩上屋敷小石川邸が火災にあったり、小石川邸に將軍を迎えるために莫大な経費が必要になっ

知っておきたい日本史 江戸時代のお金事情 商品の価値を決

めたり、支払いの手段として社会に流通しているものを貨幣といいます。江戸時代、幕府は全国共通の貨幣(正貨)として金貨・銀貨・銭貨(銅銭)を発行していました。また、それとは別に、各藩も領内でのみ使える貨幣を発行していました。それが「藩札」です。藩札は正貨と交換することができ、集めた正貨の一部は残しておき、それ以外は赤字を補ったり借金の返済に使いました。宝永4年(1707)に一度、幕府から発行禁止令が出されますが、享保15年(1730)に解禁され、明治時代まで藩札は発行され続けました。



集めた正貨の使い道は…



水戸藩で商売したいから正貨を藩札に交換してちょうだい

たりなど、藩財政は一向に良くなりません。一時的に富商や富農からお金を取り立てても、苦境を脱することはできませんでした。そして元禄16年(1703)、またもや江戸小石川邸が火災に見舞われると、いよいよ綱條は藩政を改革するため、藩札(↓知っておきたい日本史)の発行に踏み切りました。水戸藩の藩札は領内に広く流通しましたが、発行してから4年後の宝永4年、幕府から禁止令が出されたため、藩札は発行停止となりました。このとき藩札を期限内に正貨と引き換えられなかった領民

が多く、その不満は大きかったようです。※1 附荒…水田に苗を植えたものの、天候不順や労働力不足などで放置され、荒れてしまった土地のこと。※2 干ばつ…長い間雨が降らなかったり、雨が少なかったりすることによって起こる、水不足の状態。

お金がなければ作れない 鑄銭事業の始まり

江戸時代に流通していた貨幣のうち最も使われていたのが銭貨でしたが、

やがて銭貨の素材である銅の国内生産量が減ってしまいます。幕府は延享4年(1747)銭貨の鑄造※3を停止し、代わりに明和2年(1765)鉄銭の鑄造を始めました。水戸藩も明和5年に幕府から許可を受け、現在のJR水郡線常陸太田駅のあたりに鑄銭座を造り、鑄銭(銭を鑄造すること)を始めます。

さて、鑄銭を始めたことにより、これまでの銭不足は解消されましたが、その反面、銭相場下落を招くことになりました。そのことに反感をつのらせた領民

はついに明和8年(1771)4月1日、静神社(那珂市瓜連)の祭礼に合わせて立ち上がり、神輿をかついで鑄銭座をおそいました。その結果、鑄銭座は壊され全焼し、一時鑄銭事業は中断せざるを得ませんでした。続いて同年11月、元の場所にて再開された鑄銭座は、先の暴動にこりて嚴重な監督が行われたとい

います。ところが銭相場下落は変わらず、安永元年(1772)、幕府の命令で再度中断することになりました。

しかし藩は鑄銭座再開について幕府に願ひ出、結果、安永3年より規模を縮

小して鑄銭の許可が下りたため、3度目の鑄銭事業が始まりました。途中領民たちの不穏な動きがあったり、数回の火災に遭いながらも事業は続けられ、安永6年7月をもって鑄銭座は閉鎖されました。閉鎖の理由は、幕府から認められた期間が満期となったためとされていますが、銭相場下落で経済を混乱させ、領民の生活をおびやかしたことも理由のひとつだと思われます。

水戸藩こぼれ話 二孝女物語 大分県臼杵市と姉妹都市となるきっかけになった、親孝行の物語があります。文化元年(1804)3月、現在の太田市の農民初衛門は、浄土真宗の祖とされる親鸞聖人の遺跡を訪ねる旅に出かけました。持病が悪化したため、青蓮寺(現在の常陸太田市東連地町)で面倒を見てもらうことになりました。それから7年後の文化8年、父のこ



↑ 青蓮寺本堂

とを伝え聞いた娘のつゆ(22歳)とき(19歳)は、道中の危険を承知で父を迎えに行くことに決めます。臼杵市と青蓮寺の距離は約1200キロ、現在のよう

水戸藩こぼれ話 うな井の生みの親

「うな井」を考案したのは常陸太田市出身の大久保今助であることを知っていましたか?今助が江戸から現在の常陸太田市に帰る途中、牛久沼で渡し船を待っている間、茶店でうなぎのかば焼きとどんぶり飯を頼みました。ところが注文した品が出てきたと同時に「船が出るよ」の声。今助はとっさにど

んぶり飯の上にかば焼きの乗った皿を逆さにかぶせて船に乗り込みました。船が対岸に着いてから土手に腰をおろして食べたところ、うなぎがほどよく蒸されて柔らかくなり、ご飯にはたれが染み込んで、これまでに食べたどのうなぎよりもおいしかったそうです。



文化財紹介 市指定文化財 二孝女関係資料 臼杵に帰る途中、つゆとときは青蓮寺に向けて感謝の手紙を書きました。それが現在も青蓮寺に残っており、道中で出会った臼杵藩士が青蓮寺に宛てた書状や、2人の行動に心打たれた人から送られた和歌や俳句などと一緒に、平成22年に市の文化財に指定されました。青蓮寺では、毎年10月に行われる「集中曝涼」で、これらの資料を虫干しを兼ねて公開しています。

